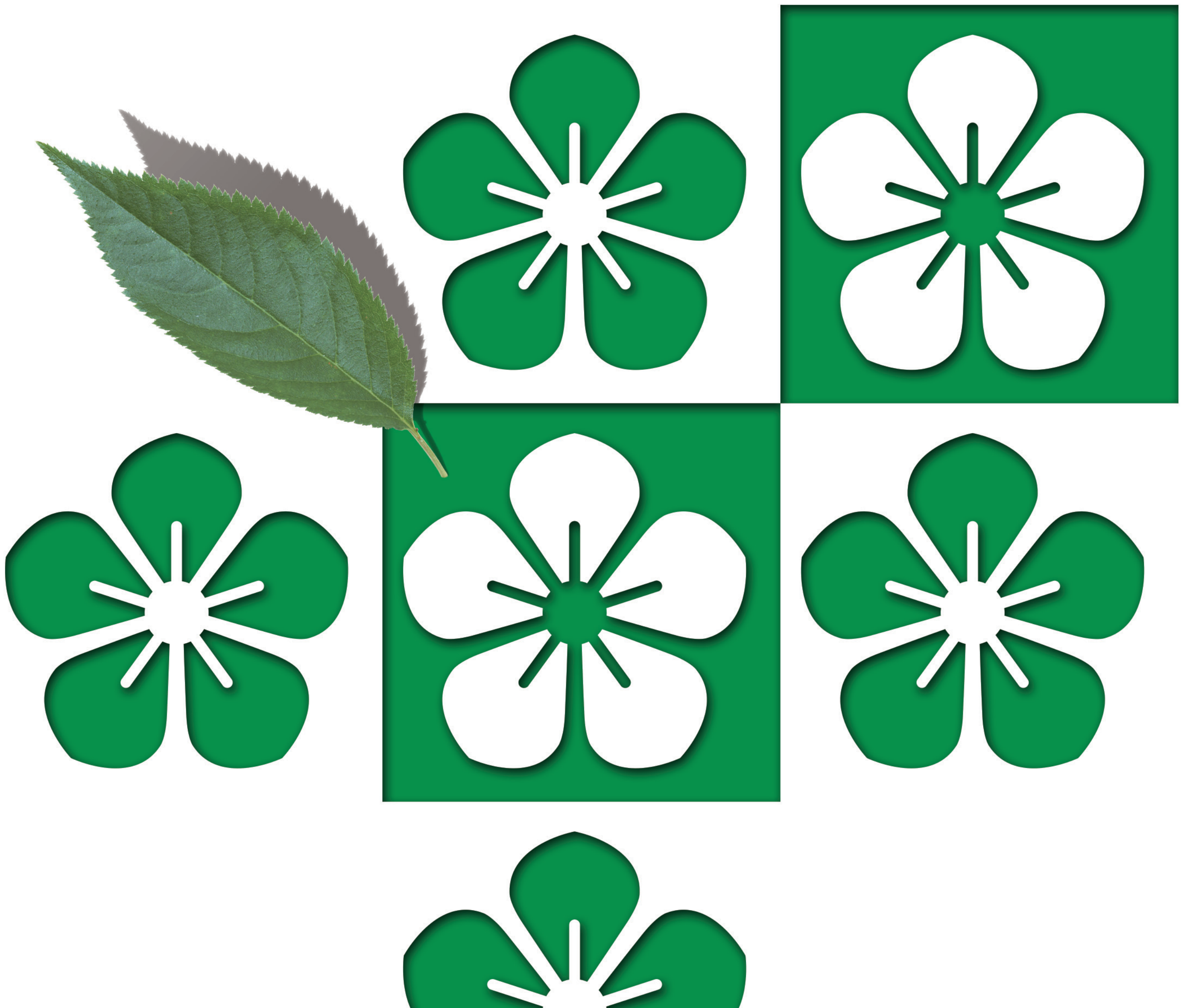
生涯学習情報誌

Life Learning

4
2017 Apr.
NO.320



生涯学習開発財団

2016（平成28年度）「博士号取得支援事業」助成金授与者決定

平成28年度博士号取得支援事業の合格証授与式が3月13日(月)、東京・虎ノ門の生涯学習開発財団にて行われた。冒頭、財団理事長・松田妙子が「私は65歳の時に、苦手なことにチャレンジしようと思い、当時いちばん嫌いだった勉強をやろうと決意しました。日本の伝統的住宅の研究をして、71歳の時に東京大学の博士号を取得しました。自分がやりたいと強く決意することが出発点ですが、それ以上に大切なことは、決めたことをやり遂げることです。皆さんも今日が出発点、博士号取得まで頑張ってください。やり遂げることが重要です」と鼓舞した。

●合格者と研究テーマ

神谷光信（56歳）
「ポストコロニアル的視座より見た遠藤周作文学の研究：村松剛・辻邦生との比較において明らかにされた異文化受容と対決の諸相」

斉田 要（61歳）
「遺伝子の発見、解明、と産業応用」

髙橋保幸（53歳）
「日本の職業資格の特質と整理・統合に関する研究―企業（民間）主導型職業教育訓練システムの解明に向けて―」

中川有紀子（52歳）
「女性管理職育成・登用は、日本企業の組織をどう変えるか―745社の日本企業の定量分析と日米韓企業4社の定性分析から実証する―」

原田浩司（57歳）
「低輻射加熱を受ける木材の燃焼性能および高温域に晒された木材の強度性能に関する研究」

吉澤厚文（58歳）
「福島第一原子力発電所における事故対応の分析に基づく緊急時対応力向上に関する研究―レジリエンスエンジニアリングを用いた教訓の抽出とその実装方策の検討―」

（五十音順、年齢は授与式当日）

助成金授与者決定

財団会議室にて、理事長・松田妙子から6名の合格者一人ひとりに合格通知書と助成金目録が授与された。その後理事長室で桜餅をいただきながら懇談。張競選考委員長からも総評とともに励ましの言葉が伝えられた。

選考の言葉

選考委員長　**張 競**
（明治大学教授／博士（学術））

合格した6名の方々に祝賀の意を表したいと思います。本当におめでとうございます。

本事業は今年で7年目を迎え、合計応募者数は346名に達しました。これもひとえに松田妙子理事長をはじめ、事務局の皆さん、選考委員の諸先生のお蔭だと感謝しています。

今回の募集は昨年12月15日に締め切られ、全部で55名の応募がありました。第一次選考では理事長および4名の選考委員からなる選考委員会により16名の候補者が選ばれました。2月15日、第一次合格者の面接が行われ、続いて第二次選考委員会による最終選考の結果、6名の合格が決定されました。

第一次選考の合格者は各分野において優れた研究業績を挙げた方々ばかりです。しかし、採用枠には限りがあり、選考委員にとっては難しい判断でしたが、断腸の思いで16名の候補者から6名を選びました。複数回の挑戦でめでたく合格を勝ち取った方もいます。惜しくも選に漏れた方は一層精進し、来年以降も応募するようお待ちしています。そして、めでたく合格した方はますます努力し、一日も早く博士号を取得するよう、心より期待しています。

生涯学習をめぐる環境は大幅に改善され、社会人の博士号取得を目指す方も年々増えています。とはいえ、50歳以上の社会人にとってはまだまだ困難が多くあります。応募者の皆さんが困難を乗り越え、博士号の取得を目指して一生懸命に努力している姿に、選考委員一同は深く感銘を受けています。

本事業開始以来、のべ55名の方が合格し、うち26名がすでに博士号を取得しました。生涯学習を推進するために、選考委員一同は皆さんとともに、本事業のますますの発展のために微力を尽くしたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

2016

博士号取得支援決定をうけて

ポストコロニアル的視座より見た遠藤周作文学の研究：村松剛・辻邦生との比較において明らかにされた異文化受容と対決の諸相

神谷光信
56歳
放送大学大学院
文化科学研究科
神奈川県立麻生高等学校
教諭

■研究目的

明治時代の思想を文学という形で表現した森鴎外や夏目漱石などについては既に多くの研究があるが、第二次世界大戦後のポストコロニアル(脱植民地)時代に出発した作家の研究は未着手といってよい。そこでキリスト教作家として著名な遠藤周作を研究対象に選び、日本と西洋との対立図式という視点だけではなく、欧州列国の植民地であったアフリカ、中東などの第三世界に対する作家の眼差しに着目することで、戦後の冷戦期に活動した知識人が西洋と非西洋をどのように捉えていたかを解明する。その際に、遠藤と同世代で、フランス文学を専攻した村松剛と辻邦生を参照する。この研究をモデルケースとして、グローバル時代における異文化間相互理解の一助にしていきたい。

■合格のコメント

博士号取得はこれまでの日本近代文学研究の集大成だが、同時に国際的な日本学研究者集団の一員となるスタート地点と捉えている。今後は国際日本文化研究センターとのつながりを生かして、海外の研究者と共に研究活動を展開したい。諸民族の平和的共存のために、文学、芸術がどのような貢献を果たすことができるかも解明したい。研究成果は執筆活動や市民講座での講義などを通して社会還元していきたい。

遺伝子の発見、解明、と産業応用

斉田 要
61歳
筑波大学大学院
人間総合科学研究科
国立研究開発法人
産業技術総合研究所職員

■研究目的

人間の体は60兆の細胞から成り、各細胞には2万数千種類の遺伝子が存在する。その中に生体から血管や腸管を収縮させる生体分子ET2を発見。その機能を解明することが目的である。まずは設計図である遺伝子を細胞から単離し、暗号(塩基配列)を解き明かすと生体分子の前駆体タンパク質が明らかになり、生体分子の生合成経路が解明される。さらにその遺伝子の構造、組織における発現、分子の化学的な進化、生体機能の詳細な推定、メカニズム等が順次解明された。これらの基礎研究の蓄積は、この生体分子発現の異常に起因する病態(癌、高血圧、消化器・呼吸器疾患、老化など)の治療、予防に役立つ。高齢化に伴う疾患の解明、診断、治療、予防に貢献できる。

■合格のコメント

通産省や研究所在職時の活動(40～60歳)を振り返り、定年後に分析、調査、考察を加えながら、博士論文に結実させた。集中力が必要とされる大変な作業でも、次世代に貴重な経験を伝えられる。シニアの重要な社会貢献になり、芸術作品と同様、後世への遺産にもなるかと思っている。今回の評価はありがたく、最新動向の調査や学会参加のためとても助かる。博士号取得後は英語での論文も発表したい。

日本の職業資格の特質と整理・統合に関する研究 ―企業(民間)主導型職業教育訓練システムの解明に向けて―

髙橋保幸
53歳
東北大学大学院
教育学研究科
宮城県職員

■研究目的

日本企業において、その特徴であった終身雇用制や年功序列賃金制が終焉しつつあり、積極的な転職が推奨される雇用システムに変化している。しかし、転職の際、職業資格は優位との認識があるが、現在の職業資格は職務遂行能力を示すものではなく、採用の際の価値も明確になっていない。この研究は、職業資格が整理・統合されていない理由として、職業教育訓練が企業主導で行われていたと仮定し、雇用形態、経費的、政策的、質的のそれぞれにおいて、どのように企業が先行し、どういった面が社会的な実像に即した特質を持っていたかを明らかにすることが目的である。日本にとって真に必要な職業資格、それを生み出す職業教育訓練制度や政策の解明につなげる。

■合格のコメント

この研究では、職務遂行能力を資格化したイギリスのNVQを参照している。現在、EUでは各国における資格制度の整備を行い、EQFとして各国の資格を標準化する作業が進められている。日本でも研究成果が労働政策の提案に結びつけられる活動にしたい。現在は博士論文執筆が第一目標だが、論文発表や学術的な集会を定期的に行い、職業教育、職業資格、職業訓練を連動した具体的な政策提案につなげたい。

2016

博士号取得支援決定をうけて

女性管理職育成・登用は、日本企業の組織をどう変えるか ―745社の日本企業の定量分析と日米韓企業4社の定性分析から実証する―

中川有紀子
52歳
慶應義塾大学産業研究所
共同研究員
立教大学大学院ビジネスデザイン科特任教授

■研究目的

女性管理職が多い職場とそうでない職場の業績は違うのか、違うとすればどういう条件で業績が最大化するのかを定量分析。女性社員比率、女性管理職比率が多い企業は、将来の企業価値を測るTobinQが高いことが判明した。TobinQを高めるには、残業時間が少なく、CEO直轄のダイバーシティ推進室があり、長時間労働ではなく成果でパフォーマンスを評価する企業であることを実証。さらに組織の内部に入り込んだインタビューを日米韓の企業で実施した。その結果、CEO、事業部長、ライン管理職の各層のコミットメントと人事システムが一体となって、女性管理職育成に影響を及ぼしているかを聞き取ることができた。

■合格のコメント

日米企業での人事の実務家としての28年の経験を生かして、人生100年時代を予測しながら、海外の研究者、日本の経営者と人事部門に一石の示唆を投じられる博士論文を完成させることが、10年間の後期博士課程での最終目標。一生懸命に目標に向かって取り組む姿勢を2人の息子に見せることもできた。人生は一生勉強であることは息子たちにも伝わり、2人とも医学の研究を志し、海外論文の読み込みや実験に取り組んでいる。

低輻射加熱を受ける木材の燃焼性能および高温域に晒された木材の強度性能に関する研究

原田浩司
57歳
大分大学大学院
工学研究科
木構造振興株式会社
研究員
ウッドストック技術士事務所

■研究目的

公共建築物の木造化の推進につなげるために、性能設計にかかわる火災工学の専門家ではない技術者(構造一級建築士など)でも使いこなせるようにマニュアル化を目指す。これまで調査・研究が実施されていなかった低い輻射熱を受ける木材の燃焼データを小試験体で多条件で実施し、「燃える」の始点である着火する条件の整理と、着火に至らない熱劣化を受けた木材の強度性能に着目。50年以上荷重を受け続ける建築物の構造用材料の要求条件を前提とした、実用化に速結する判断基準の提案をした。平成22年10月に施行された「公共建築物等の木材利用の促進に関する法律」が目指す、国産木材の需要拡大に大いに寄与できる。

■合格のコメント

大きな空間がある建築物の屋根の木造化が推進されれば、国産材の需要拡大に取り組む地方の木材関連産業が活性化され、森林荒廃に頭を痛める林業関連団体にも活路を見出すことができる。最初の一歩として地方の構造設計一級建築士や中小ゼネコンに、研究成果をマニュアル化し、根付かせていきたい。設計の自由度を上げることが課題だが、使用可能な樹種を増やし、木材が受ける加熱強度のレンジを広げるなど、基本データの蓄積を図る。

福島第一原子力発電所における事故対応の分析に基づく緊急時対応力向上に関する研究 ―レジリエンスエンジニアリングを用いた教訓の抽出とその実装方策の検討―

吉澤厚文
58歳
長岡科学技術大学
技術経営研究科
技術研究組合国際廃炉研究開発機構専務理事

■研究目的

なぜ事故が起きたかではなく、想定を超えた事象に見舞われた発電所における現場から、現場で対応する組織の緊急時対応への実践的な教訓を得ることが目的。ダメージを受けてもそこから回復、または破局的な状況を避けるための行為を対象としている。現場対応全体を俯瞰するために、時系列を重視した限定的な合理性の中で、どのような判断が行われたかに注目する。事故調査から得られた教訓と、このようなアプローチから得られる教訓の違いを明確にし、事故からより多くの教訓を抽出するための方法論について提言する。書類だけでは得られない現場の状況の確認については、福島事故の対応者、関係者との意見交換を実施し、研究結果との整合性などを確認していく。

■合格のコメント

レジリエンス(回復行為)エンジニアリングをいち早く日本に導入した第一人者の北村正晴・東北大学名誉教授を中心に2013年から定期的に研究会を開催。私も参加し80回近い討議を行ってきた。これからも参加継続し、研究を深めていきたい。電力だけではなく、通信、輸送、金融などの社会技術システムにおいても、「想定外事故は起きる」を前提とした緊急時対応を対象とした本研究は適用できる。

祝 2016年3月　一橋大学博士号（社会学）取得

赤木佳寿子 さん（取得時55歳）

子育て中の不思議解明に始まり、薬剤師の存在意義を示す博士論文へ

【論文テーマ】戦後日本における薬剤師職能の変容 ―医薬分業の発達史の観点から―

赤木佳寿子さんは、「社会人で博士号を目指す方は皆さん仕事をされていて、仕事に関連した研究をされる方が多いと思います。私は主婦だったのでそうしたベースがなく、財団の助成は、私が博士号を目指してもいいんだと励まされる、ありがたい支援でした」と明るく語る。主婦が3人の子育てをしながら通信で学び始め、とうとう博士号取得に至ったというのは、本事業応募者の中でもめずらしい。

とにかくよく学ぶ人だ。1990年以降、子育てと並行して、放送大学の臨床心理学、母子保健、言語と教育、患者学など、20単位以上を取得。夫の海外赴任に同行した際は、ネイティブ向けの英語のライティング講座まで修了している。

■出来そうなことは途中でやめられない

「子育ては不思議なことがいっぱいでした。最初の子が病気がちだったこともあって、そのたびに何でだろうと調べたんです。調べ始めるとやめられず、次々とつながっていきました」

07年には慶應義塾大学文学部を通信で卒業した。

「主婦をしながらなので身の丈に合った研究をしていたのですが、慶應の卒業時に先生から、『あなたがやっていることは先導的な研究に発展するから、ぜひ続けなさい』と励まされたんです。それで09年に、無謀にも一橋大学大学院社会学研究科に入りました。一橋では修士課程から、医療政策の第一人者である猪飼（いかい）周平教授に指導を受けました。科学的な思考の仕方を徹底的に叩き込まれたことで、可能性が広がり、博士号まで突き進めたと思います。その代わり、子育てしながら毎晩書物を読んで、いつの間にか空が白んでくるという生活でした」

幼少時から出来そうなことを途中で投げ出したことはない。大学院のゼミの同期で博士号取得まで行ったのは赤木さん1人だった。

■目的から手段に変わった医薬分業

薬学科を出て製薬会社勤務の経験がある赤木さん。医薬分業が加速した90～00年代の街の薬局の変化を見ながら、「なんでだろう？」がむくむくと湧き上がっていた。薬局によって対応が違い、保険点数さえまちまちだったのだ。

明治時代に西洋医学が入ってきた時、すでに医薬分業は謳われていた。にもかかわらず、医師が薬を出し続けていたのは、法律の例外が状態化していたから。何度も是正が試みられたが変わらなかった経緯があり、明治以来、医薬分業は調剤権をめぐる闘争という構図があった。それが、70年代からの医療費を抑えるための国策で、薬価差益を押さえて医師の技術料を上げるという経済的な誘導による、手段としての医薬分業が始まった。

医薬分業は薬剤師にも変化を求めた。現在の医療は、患者中心の医療、多職種連携、患者のQOL向上などへ価値観が変化しているが、その変化は薬剤師の職能の変容と連動していることがわかった。変わるきっかけは、工業化によって薬剤師が薬を作る必要がなくなったこともある。品質を担保する責任も工場が担っている。そうした変化の中、薬剤師がどこを向いたかというと、患者中心でありQOL向上目的の薬物療法だったのだ。

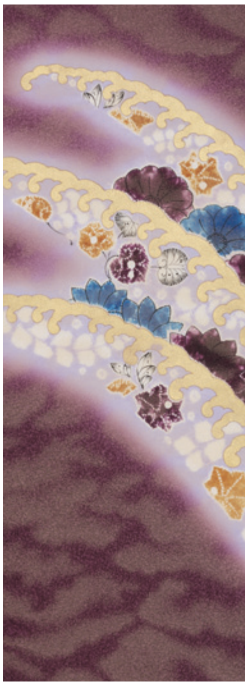
「学びたいと思ったときがチャンスです。本支援制度のように助けてくれる人も出てくるので前向きに」と励ます。

■薬剤師が目指すべき指標に

論文には書かなかったが、100年間医薬分業されなかったのは、しなくてもやって来れたという側面もある。学会発表で、「なるほど」「面白いね」と関心を持たれる一方、「わかるけどね」という薄い反応もまだある。現在は、昭和薬科大学地域連携薬局イノベーション講座研究員として、無給だが自由に研究できる立場にある。

「同じ医療分野でも、看護師のナイチンゲール憲章や医師のヒポクラテスの誓いのような、心の支えになるものが薬学にはなかったんです。この研究が、薬剤師が目指すべき指標の一つになればうれしいです。今後は、薬品業界や国の医療政策にもインパクトを与えられる研究を続けたいと思います」

絞り染訪問着・濃春
(2011年)



辻が花袋帯・立浪
(2003年)

表現の可能性は無限。新たな絞りが生まれる予感も

染織

小倉淳史

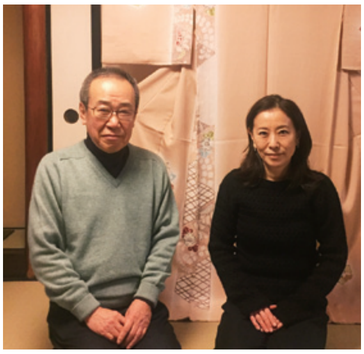
Ogura Atsushi

1946年	京都に生まれる
1975年	第22回日本伝統工芸展にて初入選
1988年	NHKの依頼で徳川家康の小袖2領復元
1989年	パリ展「美は東方より」(染技連)
1993年	第30回日本伝統工芸染織展にて日本工芸会賞
1998年	紺綬褒章受章
2001年	「日本の絞り」小倉家一門展(ドイツ・ライスミュージアム)
2005年	第39回日本伝統工芸染織展にて日本工芸会会長賞
2006年	重要文化財「束熨斗模様振袖」の欠損部分を復元
2007年	NHK「美の壺」File71 絞り染め出演
2015年	第40回日本伝統工芸染織展にて文部科学大臣賞

小倉家は京都の染織工芸を代表する家の1つで130年以上の歴史があり、5代目が小倉淳史さんだ。その父・建亮(けんすけ)さんは、初代の萬次郎さんから友禅を学び4代目となったが、探究心はそれにとどまらず、義母の実家である絞り染めの岡尾家からも学び、江戸時代に消えた技法「辻が花」を復元。「絞りの小倉」「辻が花の建亮」として名を成した。絞りは絵模様の輪郭を縫い絞って防染し、多色に染め上げる染織の技。特に花鳥柄の華やかな辻が花は人気を博す。淳史さんは、父から受け継いだ辻が花の技法と、重要文化財の復元などを通してさらに磨いた技術で、新たな絞り染の可能性に挑んでいる。

――絞り染めはいつ頃から行われていたのですか。

正倉院の御物に絞った染織があるので、奈良時代以前から行われていたと思われます。布を結んだり括ったりする初歩的なものから、縫い絞った糸の圧力で防染するものまで、すでにあったようです。絞りの始まりは、大きな布を染める際にそれ相応の大きな容器がなく、小さ



聞き手:上野由美子(右)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年〜2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

な容器で代用したところ布がくしゃくしゃになって、偶然まだらに染まったのを面白がったことからとされています。そこから、意図した模様に染める絞りの技術を生み出し、デザインとなっていったわけです。

——絞り染めの中でも「辻が花」とはどんなものですか。

初めは麻の生地に簡単な模様を絞り、単色で染めた庶民的な着物でした。やがて絹にも染めるようになり、色ごとに絞って染めを繰り返す技法で、地の色と花や葉をそれぞれ違う色にする多色染めになっていきます。室町時代後期から安土桃山時代になると、花びら1枚ごと、葉脈1本ごと、虫の噛み跡まで墨で細く描き、隈どりぼかしを加えるなど繊細な表現が進化しました。金箔、銀箔、刺繍なども施され、豪華な着物として一気に隆盛し、辻が花と呼ばれたのです。女性の着物だけでなく、戦国武将の小袖、羽織、胴服としても数多く制作されました。当時のもので現存するのは300点ほどしかありませんが、上杉謙信、豊臣秀吉、徳川家康の遺品などがあります。女性では織田信長の妹・お市、その娘の茶々、初、江や、細川ガラシャ等、この時代の上流女性は皆、辻が花を着ていました。

——江戸時代に辻が花が消えたのはなぜですか。

諸説ありますが、政権が豊臣から徳川に代わり、文化の中心も大坂から江戸に移っていく中で、辻が花の流行も終わったのだと私は思います。

現代の辻が花は、まず生地が違います。江戸時代の縮緬はガーゼのように軽く薄かったのですが、だんだんと生地は厚く重くなりました。蚕に品種改良が加えられ、蚕や繭が大きく育つようにしたら、生糸自体が太くなってしまったからです。着物は重いほうが高級という見方もありますが、進歩かどうかは疑問です。

染料も、昔は草木を煮出した草木染めでしたが、現代は主に化学染料を使います。草木染めは植物ごとに季節

絞り染訪問着・春望
(2005年)

辻が花訪問着・春秋
(2013年)

絞り染訪問着・玄冬の舞
(2010年)

が限られるので、糸染めなら良いのですが、多色を用いる絞り染めには向きません。現代は色数も増え、この形をこの色で染めたいと思えば自由にできます。

当時の辻が花と復活した辻が花では、技法が違うという人もいます。学者の定説では、14世紀末ころの『三十二番職人歌合』という絵巻に描かれている桂女の着物の絵柄が、辻が花の始まりとされていますが、あくまでも絵なので、それも実際とは違うかもしれません。いずれにしても、現代の素材を活かして、現代の技術を活かして、現代の人が着て喜んでいただける着物であることが、何より大事だと思っています。

——絵柄はどう決めていますか。

構図は染める前に頭の中に描かれています。写実的な草花などはスケッチしますが、辻が花は定番の図柄があって、それらは全部憶えています。写真の「立浪」は典型的な辻が花の模様で、桜、楓、銀杏、菊、海松穂を用いています。着物を着る場面はお祝い事や茶席が多いので、吉祥文様を基本にしつつ上品になるよう心がけます。また、展示の美と着用した時の美は違うので、押しつけにならないよう注意しています。

——今後は絞りをどう発展させていきたいですか。

絞り染め自体はほぼ世界中にあり、国ごとにいくつか技法が見られますが、日本の絞り染めの技法は1000とも2000とも言われ群を抜いています。技術の高さも考えれば、日本独特と言ってもいい工芸なのです。2001年にドイツで「日本の絞り」小倉一門展を開催しました。華やかで、しかも繊細な日本の着物は海外でも高い評価をいただけることがわかりました。

絞りには多様性があり、これからも何百通りにでも変えていくことができます。表現の可能性は無限で、組み合わせによっては、全く違う絞りが生まれてくると思って期待しています。

ソーシャルビジネスグランプリ2017

2月19日㈰ 虎ノ門・ニッショーホールにて
主催：社会起業大学／デモクラシー2.0イニシアティブ

社会起業家部門

障がい者の生き甲斐・やり甲斐を生む社会つくり

●渡部哲也（わたなべてつや）さん

仙台の自然派ビュッフェレストラン六丁目農園で多数の障がい者を雇用中。苦手な作業を減らし得意分野を生かせる職場を作り、親からは「これで死ねる」との感謝も。同時に耕作放棄農地の活用や人手不足解消も目指す。

会社から社会へ貢献する生き方への挑戦

●水野順之（みずの よしゆき）さん

「さえない会社員生活」を打破したいと考えたアイデアは全てボツ。しかし、社会起業大学の仲間とホームレス支援、福島の震災復興支援などに関わる中で、社内起業的なプロボノやスタディツアーなどの企画を決意した。

21世紀の産婆が日本を変える

●濱脇文子（はまわき ふみこ）さん

女性が出産することへの不安解消や産前産後のサポートをするために、（一社）産前産後ケア推進協会を設立した。妊娠、出産、子育てまで切れ目のない支援と、100年後を創造する地域と人の育成をめざす。2人の女性審査員も「ぜひ手伝いたい」と評価。

政治起業家部門

NHK『クローズアップ現代』のキャスターとして日本の報道番組の在り方に深い変革をもたらした

●ジャーナリスト 国谷裕子（くにや ひろこ）さん

昨年まで23年間務めた同番組の生放送インタビューにおいて、権力者相手でもおもねらず、安易に持論を述べず、的確な質問で問題の本質となる重要なメッセージを引き出す姿勢が、報道番組に変革をもたらしたと評価。

外出困難な方々へ質の高い訪問理美容をお届けし、制限のないその方らしい生活が出来るお手伝いをしたい

●訪問理容美容まる 高木のどかさん

認知症の祖母の髪を切ってあげたら笑顔ではめてくれた。対人恐怖の人が訪問するうちに改善してきた。美容には力がある。均一流れ作業ではない高価値のサービスを提供する。

エンタメのチカラで毎日をちょっとだけよくしたい

●田村勇気（たむら ゆうき）さん

お金をかけずに人が集まり社会を元気にする企画として、心温まるストリートアートを提案。会社に籍を置きながらNPO活動として展開し、社会、自分、会社ともWinWinに。わくわくし、成功の予感がすると高評価。

2月19日に開催された「ソーシャルビジネスグランプリ2017」の冒頭では、政治起業家グランプリ受賞の国谷裕子氏と藤沢久美氏（ソフィアバンク代表）の対談が行われた。昨年3月まで、NHK『クローズアップ現代』のキャスターを23年務めた国谷氏。日本屈指のキャスターと言えるが、初めて担当したBSの番組は不評で、1年で降板という挫折から始まっていた。意外にも「帰国子女の自分が知らないことがあるのでは？」というコンプレックスが、スタッフとの深い議論や生放送インタビューでの的確な切込みにつながったのだという。

政治問題を扱う際の公平・公正の概念が変わってきたのは事実で、予想外の降板にはなったが、「地位が高い人こそネガティブな方向から訊く。それにより事実を浮かび上がらせる」姿勢を貫いた。今は「持続可能な開発の在り方」に視点をおいているという。

社会起業家部門では、障害者雇用の渡部哲也さんが審査員特別賞、妊娠・出産・子育てサポートの濱脇文子さんが共感大賞を受賞。それら始動済みの活動を押さえてグランプリを獲得したのは、ストリートアートで街を元気にする田村勇気さんのプランだった。

社会起業大学の田中勇一理事長は、「私も起業して木っ端みじんの体験をした。でもやってみなくてはわからないことは多い。今日が、一歩を踏み出し、困難を乗り越える勇気になれば」と締めた。

前回グランプリ受賞者の塩崎良子さんが活動報告。株式会社TOKIMEKI JAPANを設立し、がん患者のケア用品やギフトなどを開発し、売り子付きワゴンショップ派遣などユニークな展開をしている。

登壇者も審査員もプレゼンターも皆で。

財団理事長代理・佐藤梨奈から起業助成金の目録を授与。田村さんは大手広告代理店勤務。ダメキャラが頑張って飛躍するストーリーが大好きという。